

私教育最前線

『私教育最前線』のバックナンバーはコチラ!



授業中に世界を変える!? 第一学院の本気のSDGs教育<チャリティーンズ>が止まらない



むらお りゅうすけ
村尾 隆介

ビジネス書作家

SDGsに関する書籍を含め、国内外で20冊超の著書を出してきたビジネス書のベストセラー作家。現役の経営コンサルとして講演やプロジェクトで今日も世界を飛びまわる。14歳で単身渡米、ネバダ州立大学(UNLV)政治学科卒。帰国後はホンダ本社で中東の営業を担当。豊富なグローバル経験・生き方と働き方が一致したキャリア・数多くのチャリティ活動が評価され、近年は教育界より「ユニークなカリキュラムづくり」の依頼が増加。第一学院とのつながりはスポットで(社会とつながる講座)でグローバルズムについて教えたことから。その後、レギュラー講座として起業家教育(スタートアップスチューデント・プロジェクト)で高校生たちと企業を結びつけ商品プロデュース+販売を行う実践型授業を4年行い、現在。



第一学院高等学校

<https://www.daiichigakuin.ed.jp/chariteens/>



チャリティーンズのロゴはハートモチーフ

『授業中に世界を変えよう!』とは、第一学院が始めたSDGsのクラス<チャリティーンズ>の募集コピー。募集? そう、この授業は全国からオーディションで選ばれた17名の“本気の生徒”と創りあげています。

私教育最前線

気兼ねなく浮きこぼれる…そんな場所さえあれば花は咲く

学習意欲や知能が高いゆえ、教室では疎外感がある…。でも、米国のように飛び級できるわけじゃない…。どこのクラスにも存在する、教育界でいうところの“浮きこぼれ”には、どんな舞台を用意してあげればよいのか? 第一学院のひとつの答えは、そんな彼ら・彼女らを「みんな集めて、ひとつのクラスをつくる」です。これは全国にキャンパスを持つ第一学院の特性と、オンライン授業というニューノーマルを活かした挑戦で、主となるテーマはSDGs。生徒たちが発見した社会課題と、その解決のアイデアを実際に形にしていく内容となっています。授業を見学する人たちが驚かされるのは、普通は嫌がられるプレゼンも、このクラスでは我先にと皆が自発的に行い、ジョークを交えながら大人も唸る意見を述べる。カリキュラムディレクターで、自ら授業を教える村尾隆介氏は、こう言います。「ここでは“浮きこぼれ”が浮き放題。誰にも遠慮なく本来の力を発揮できるし、彼ら・彼女らも、このクラスで自分の能力の高さを再認識し、さらに自信を深めています。そもそも社会問題に敏感な生徒が多いのも浮きこぼれの特徴なので、授業のテーマも知的好奇心にドンピシャなのでしょう」。



起業家教育(スタートアップスチューデント・プロジェクト)の高校生たち

私教育最前線

名前ひとつですべてが変わるネーミングでクラスをユニークに

しかし、一方で学校用語の“浮きこぼれ”に違和感を覚えるという村尾氏。「社会で必要なのは知識よりも自信。浮きこぼれと呼ばれて自信を深める子はいないし、その言葉には関わると面倒という印象も含まれます。だから、僕は“スペシャルシーズ”と呼びたい。生徒たちも自分には特別な何かがあると自信が持てるし、周囲の大人もいい土壌で大切に育てたいという気持ちが働くはず」。たしかに、この“特別な種”を一緒に育てようと、村尾氏の考えに賛同して集まるゲスト講師陣は豪華。作家・政治家・社会活動家や経営者がプロボノとして教壇に立ちます。他にも、このプログラムを支える事務局を「コンシェルジュ」、生徒たちの学びをフォローするOG・OBたちを「メンター」と呼ぶなど、この授業では名称がそれぞれ違います。前述の「オーディション」も平たくいえば面接。「でも、『オーディションを突破して参加している』という方が周囲に話るときもクールだし、それだけでも偉業を達成した感じでしょ?」と村尾氏は笑う。「デイズニーランドで働く人はキャスト。だからこそ、あの働き方をするんです。名前ひとつで物事は変わります。僕のクラスでは、その法則を活かしています」。



生徒+スタッフがつけるIDはあだ名

私教育最前線

答えがない時代に育みたい自信と強さと優しさと〇〇

ゲスト講師以外の授業内容を挙げると、まずSDGsの各項目をトピックにした村尾氏のエンタメ性高い講義があります。「今ここにあるローカルとグローバルな社会問題を知ってもらい、それに対する考えや解決法を述べるプレゼンを各生徒に高頻度で行ってもらっています。取材やリサーチ等も積極的にやってくれます」。またプレゼン以外にも、たとえばジェンダーレス制服をテーマに、クラスを賛成派/反対派に分けたディベートも実施。「個人的な賛成・反対は関係なく、クラスをスパッと2分割します。異なる意見を真摯に聞く・相手の立場に立つといったエンパシー教育の実践版です」と、村尾氏はその狙いを語ります。週末を使って、各生徒が地元でスマホ片手にゴミ拾いを行うのもユニーク。「その後、皆で気づきやゴミを減らすアイデアをオンラインで語り合います。ネット版の課外授業ですね(笑)」。他にも1年かけて行うビッグプロジェクトもあり、現在は「エコバッグのシェアリングの仕組み」も並行してつくっているそうです。「答えがない時代だからこそ、育みたいのは自信・強さ・優しさ。総合すると困っている人のところへ自ら歩み寄れる勇気かな」と、村尾氏は遠い目で空を見上げました。



「ニュースを観る」を習慣化するステッカー

私教育最前線

チャリティーンズの名前の由来と現実的な進路問題

忘れてならないのが、授業のはじめに毎回行われる、『直近のニュースに関するミニテスト』。全問正解の生徒には“パーフェクトステッカー”がもらえます。でも、これには単に『ニュースを見る習慣をつけよう』ということ以上の意味があります。進路で悩んでいた高校時代の村尾氏。ある教師との出会いからニュースを欠かさず見る少年となり、そこで心を痛めた事件・事故、変わりゆく世界情勢から受けた刺激が、その後の進学先を決めたといいます。「将来が定まらない・好きなことが見つからないという生徒は、ぜひニュースを見る習慣を。社会問題に詳しくなると、進むべき道も絞られてくると僕は信じています」。そういうとタンブラーから、おもむろにアイスコーヒーを口に…。「そう、僕のクラスはプラスチック禁止なのでスタッフ陣含めて皆タンブラー持参。制服であるオリジナルTシャツもオーガニックコットンです。そのすべてをSDGsの学びにしています」。この尽きることない工夫と仕掛けの数々が、ティーンズたちのチャリティ心を、どこまで伸ばすことができるのか? 第一学院高等学校のSDGs教育<チャリティーンズ>は、今後も要フォローのプログラムです。



制服のTシャツはオーガニックコットン。